

七月一五日(土)

身体が左へ回転するのを感じて、目が覚めた。今の今までどんな夢を見ていたのか、思い出せそうで思い出せない。

それにしても、暑つついなあ。寝起きの頭に、蒸し暑さが重なって、ますます思考が働かない。タオルケット、出したっけ？ その前に、洗濯機の水着、干さない。畳に手をつけて上体を起こす。

枕元に置かれたメモ書きによると、彩夏とお嬢ちゃんは既に帰宅したらしい。お昼前から五十鈴の市民プールに行つて、帰ってきてから遅めのお昼を食べ、タオルと水着を洗濯機に放り込んでから、三人で川の字になつて昼寝したんだっけ。で、いま何時？

窓の外はまだ少し明るいけど、一九時？ 適当な晩ご飯を食べようにも、乾麺も冷凍ご飯も切らしてたな。今からご飯炊いて、色々片付けながら何か作るのも面倒くさいなあ。

でも、このままゴロゴロしても暗くなるだけだし、のそのそと壁に手をつけて立ち上がる。まずは水分補給とお昼の後片付け。冷蔵庫を開けると、ポットにたっぷり入った麦茶が冷えていた。買い置きのお素麺を食べ切った痕跡も、綺麗に片付けられている。

麦茶をコップに注ぎ、立つたままグーッと飲み干すと、その冷たさに頭が少しずつ冴えてくる。もういっぱいコップに注ぎ、ポットを冷蔵庫に戻しながら半分飲む。コップを食卓において、脱衣所の洗濯機のところまで行くと、お風呂場の突っ張り棒に、水着とタオルとが干してあった。

さっきのタオルケットも、もしかして彩夏？ 何から何までやつてくれるなんて、なんてよくできた人なんだ。コレが独り身と子を持つ親の差？ 帰るときに起こしてくればよかったのと思ったけど、それも彼女なりの優しさか。

正体不明の敗北感に苛まれながら、飲みかけのお茶を飲み干した。LINEを立ち上げて、「今起きた。ありがとう」とメッセージを打ち、この後どうしようか思考を巡らせる。

寝汗は気持ち悪いけど、お風呂場の洗濯物はもう少しそのままにしておきたい

し、今からシャワーを浴びて外に出たとして、寝る前にもう一回シャワーを浴びるのもちよっぴり面倒臭い。

仕事用靴の底から汗拭きシートを取り出し、首回りと腕まわり、手が届く範囲をサツと拭いた。パツと顔を作って、多少着替えて食べに行くのも面倒だし、久々に吉野家のテイクアウトでもしようかな。

学生時代を買ったティアドロップのサングラスをかけたなら、スッピンでもなるとかなるでしょ。知り合いに会ったとしても、やり過ごせるさ。

そうと決まればお出かけ用のカバンに財布を入れ、洗面所で顔だけ洗って変な線がついていないか確かめる。お茶を飲んだコップを洗って片付けると、戸締りを確認して自転車の鍵を掴んだ。

泥除けに貼った学校指定のシールが外れただけの、十年選手の自転車に跨がり、近くの吉野家へ向かう。たこ焼き屋の前の交差点を南茨木の方へ曲がれば、あつという間に到着だ。

「おう、ルミじゃないか。また会ったな」

駐輪所に自転車を入れ、鍵をかけていると後ろから声がかかった。そちらを振り返ると、今日のプールでも遭遇した透が、持ち帰り用の袋を提げて立っていた。

初出 令和三年七月二〇日 小説家になろうにて公開